**暗闇の中に光が 2017 12 13**

**John 1:6-8, 19-28 Pr. Hitoshi Adachi**

**主の光が集まった会衆の上に豊かに照らされますように！**

**今年を振り返ってどんな年だっただろうか？もちろん記念すべき宗教改革500年だったが、個人的には自分の家族も含めて、家での生活ができなくなり施設に入る方々が多かった気がする。**

**また社会を見れば、いつも北朝鮮の発射するミサイルの問題がとりあげられていたように感じる。また最近ではエルサレムの首都の問題で、ゆれている。さまざまな分野で、分断が進んでしまった年だったように思う。**

**そして、残念ながら、この分断は収まるどころか、さらに進んでしまうというジャーナリストたちの意見を聞く。世は暮れてしまって、さらに闇は深まってきてしまっている状況は否めないと思っている。**

**ただ、このような時代背景の中で、毎週聖書を読んだいて、半世紀に及ぶ信仰生活で初めて気がつかされたことがある。世の中が暗くなればなるほど、聖書から伝わってくることが、神の愛、すなわち神が与えてくれる光に焦点が絞られていくように感じている。**

**イエスキリストがこの世に生まれた時代背景を考えるとき、私はいまの情勢と似たような局面もあったのではないかと感じている。世の闇がどんどん迫ってきていた時代なったのだと思う。　ユダヤの宗教指導者たちと庶民の間の隔たり、分断は進んでいっていたようである。**

**ローマ帝国がイスラエルを支配していた。つまり、ユダヤ教徒は、ユダヤ教の会堂への献金を納めていた上に、さらにローマ皇帝への税金を支払う必要があった。その当時、GDPのような統計があったとは思えないが、GDPのような数値をとることができていたらその数値は増えていたのかと思う。**

**というのは、集められたお金は増え社会の上層部によって軍事増強のために使われていたと思われるので。 しかし経済上の数値が上がったところで、庶民の生活は一向に改善されず、いわば貧困層にいる人々は増えていたような状況だったと想像する。**

**そのような暗闇の社会状況にあって、救い主の誕生は切望されていた。そして、聖書によれば貧困中の貧困とも思われる状況の中に、神は馬小屋の中で飼い葉おけの中に救い主イエスを送ってこられた。それは、洗礼者ヨハネが語っていた光であった。**

**その光により、盲目の者が見えるようになった。その光により、足のなえた者は歩き出すようになった。しゃべれなかった人が神をたたえるようになった。しかし、その光を人間社会は十字架にかけて殺してしまう。それでも神はその光を復活させた。多くの庶民がその光、イエスキリスト、を信じるようになった。しかし、ユダヤ教の指導部とローマ帝国はますますキリスト教信者を弾圧しはじめた。**

**12弟子のほとんどは処刑された。ローマ皇帝によるキリスト教迫害の歴史が300年近く、二ケア公会議が開からる頃まで続いた。しかし、地中海沿岸地域で、光は光であることをやめなかった。**

**人間の社会は、世界のあちこちで、地域や時代を変えて、その光を信じるものを、迫害する歴史が繰り返されてきている。私の育った日本という国でも17世紀初頭から19世紀半ばまではキリスト教を信じるものは、死刑であった。　迫害が繰り返されても、光は光であることを止めなかった。**

**神の愛、光は、神が自らが創造した人間ひとりひとりに対して、暗闇にいる人々に対して、光となり続けた。私たち、人間は暗闇になりどんどん暗くなればなるほど、星が輝いてくるのを知っている。光は決してなくならず、罪深い人間であっても、自らが創造した人間をあきらめてしまうことをしなかった。**

**先週、スウェーデンで行われていたノーベル賞の授賞式が報道されていたが、今年のノーベル平和賞はICANと国連での核廃絶条約に動いた団体に送られた。私はその中で、広島で被爆体験をしたサーロー節子氏のスピーチに私は心を動かされた。**

**被爆し、建物が倒れてきて、その下敷きになり瓦礫の中で暗闇の中にいた。その時、彼女の左肩を触る手があり、暗闇の中で声を聞いた、「あきらめるな！（がれきを）押し続けろ！　蹴り続けろ！　あなたを助けてあげるから。あの隙間から光が入ってくるのが見えるだろう？」**

**彼女の人生は、ヨハネが語っていた光によって変えられたといってよいと思う。そして、彼女はその光を証しているともいえる。その光は、今も世界を変えようとしている。たとえ分断が進もうが、光は光でありつづける。**

**世界の平和問題にしても、現在、核保有国も非核保有国との分断が進んでしまったかのように見える社会が現実にはある。しかし、そこに光、神の愛が注がれ続けている。　私たちも、救い主でも、預言者でも、エリヤでもないわけで、ヨハネがしていたように、その光、神の愛に焦点を絞って、喜んで証し続けよう。　アーメン。**